SDGs for School × SOTO ZEN

SDGs for School produced by Think the Earth

曹洞禅

⑦

The Fifth Year

今年の日本の夏は観測史上最高の暑さが各地で相次ぎ、世界でも熱波や異常気象が頻発しています。地球温暖化の進行が、いよいよ人類の暮らしを根底から揺るがす段階に入ったことを感じます。SDGsはこのような地球環境の改善も目指した2030年までのゴールです。改めてSDGsを軽んじることなく、また他人任せにするのでもなく、自分たちにできる小さな行動を続け、広げていく重要性を強く感じています。そこで、今回の「曹洞禅×SDGs for School」では、編集学生のみなさんに、学校生活の学びや、夏休みの学びから感じた2030年の世界に残したくないこと、もしくは、2030年以降にも、世界に残していきたいものについての紹介と、自分にできる小さな一歩についてまとめてもらいました。

○Minaty
・高校1年生

今年の夏休み、東北地方の美術大学でアートコミュニケーションの体験授業に参加しました。そこで学んだのは、アートは単に作品を作るためのものではなく、人と人をつなげ、互いを理解し合うためのコミュニケーションの力になるということです。ワークショップでは、誰の作品も否定せずに受け入れ合いながら一緒に作り上げる楽しさを体験し、初めて会った学生とも自然に仲良くなることができました。

僕は、この「アートを通じて人とつながれる関係性」を、2030年以降にも残していきたいと思います。社会の中には対立や孤立もありますが、アートがあれば、立場や考え方の違いを超えて対話し、協力できる可能性があると感じました。そのために、まずは自分にできる小さな一歩として、学校や地域でアートを使ったワークショップを企画し、身近な人たちと一緒に楽しめる場をつくっていきたいです。

○さとこ
・高校2年生

この夏休み、母の実家がある鹿児島県に帰省し、知覧特攻平和会館を訪れ、さらに祖母が参加している「戦争放棄」を掲げる勉強会に参加しました。知覧では、壁一面に並ぶ特攻隊員の写真や「絶筆」と呼ばれる遺書を前に、もし自分の先輩や同級生がそこにいたらと思い、胸が苦しくなりました。勉強会では、多くのご年配の方々が「孫や親戚に戦争のことを話す機会がない」とおっしゃり、私と母が参加したことをとても喜んでくださいました。

戦後80年が近づく今、「戦争体験者」の生の声を聞ける機会は急速に減っています。2030年以降に残したくないものは「戦争の悲惨さを忘れてしまう社会」です。逆に、残していきたいものは「平和の尊さを次世代へ語り継ぐこと」です。

そのために、私にできる小さな一歩は、家族や周りの人から戦争や平和についての話を積極的に聞き、自分の言葉で友達や後輩に伝えていくことだと思います。そうすることで、戦争の記憶を自分ごととして引き継ぎ、戦争の事実が風化することを防いでいけるのではないかと思いました。

○たろう
・高校2年生

今年の夏休み、私は8月23日の高円寺阿波踊りで、ボランティア活動を記録するカメラマンとして参加しました。華やかでにぎやかな祭りの舞台裏には、ゴミ拾いをしたり、運営を支えたりする多くの人々がいました。表に出ることはなくても、黙々と動き回り、笑顔で裏方を担うその姿をレンズ越しに見て、私は強く心を動かされました。もしこうした「支える人の姿」が見えない社会になってしまったら、とても悲しいことだと思います。だからこそ、私は「支える人が見えなくなる社会」を2030年に残したくないと感じました。

これまでの学校生活でも、行事やプロジェクト活動などがたくさんの先生や仲間の支えで成り立っていることに気づくきっかけにもなり、今回の体験で初めてその存在の大切さに気づきました。日常も特別な行事も、多くの人の努力や思いやりが積み重なって成り立っていることを忘れてはいけないと思います。そして、そのありがたさを言葉や写真で表現し、周りに伝えることが、私にできる大切な役割だと考えるようになりました。これからの小さな一歩として、私はカメラや文章を使って「支える人の姿」を積極的に残し、周囲に伝えていきたいと思います。そうすることで、支える人への感謝の気持ちが広がり、2030年以降も「互いを支え合う社会」を残していけるのではないかと信じています。

○あおい
・高校2年生

私が2030年以降もずっと残していきたいもの、それは日本の文化である。

先月で17歳になり、来年には成人、3年後には20歳。選挙権も与えられ、いよいよ日本を担っていくのだろう。しかし今の高校2年生の私には実感が薄かった。そんな時、母が振袖を見に行こうと誘ってくれた。

呉服屋には赤や青、淡い色まで多彩な振袖が並び、華やかな柄はまるで未来を祝福するかのようだった。私は白地に束ね熨斗が描かれた振袖を選んだ。束ね熨斗には「人との繋がりや絆が紡がれますように」という願いが込められている。多くの人に支えられてきた私にふさわしいと思った。

和柄や振袖などの文化は、時代の荒波を超えて受け継がれてきた。けれど今、効率や便利さばかりを追い、文化や人とのつながりを軽視する社会は2030年に残したくない。私はまず自分の身近な人との絆を大切にし、次の世代へ文化を渡す小さな一歩を踏み出していきたい。

協力：一般社団法人シンク・ジ・アース／
新渡戸文化高等学校教諭　山藤旅聞